

虹の ふもとには



キャンディやぶこ

指が細くて長いキレイな手をしてた人だから
付き合うことに決めたのは
22歳の時だった。
生まれて初めての男性とのつきあいに、
どうしていいかわからず
いつもごちなかつた。
こうなったのは、父のせい。
そんな心を何も知らない麻輝は、ただ
私の気持ちを解きほぐそうと、
「鍋パーティをしよう」と
鍋の材料をもってきて作ってくれたり、
ある時は釣った魚を台所でさばいてくれたりもした。
しかし、その後ろ姿に
父と似通った部分を見つける自分にイラだっていた。

2年ほどして、麻輝が小指の爪を伸ばし始めたところで
私の中の張りつめていたものが切れた。
手のキレイな人は好きだが、
小指の爪を伸ばす男は許せなかつた。

最悪なことに、
どうして小指の爪をのばしているの？と
聞いた私に
「鼻くそほじるのに便利だろ」と
ニヤッと笑って答えたことで、
別れは決定的となった。



それから6年。
もうすぐ30に手が届くところになっても、
また私は誰ともつきあえずに
日々を送っていた。

ただ、男と付き合えないまでも、
体の奥にうごめく欲求は
抑えきれず、
通信販売で毎月のように
いろんなローターグッズを買いあさっては
毎晩それで自己処理していた。
タンスの中には、
それらがぎっしりつまっているひきだしがあり、
もし一人暮らしの私がある日突然死ぬようなことがあったら・・・
これらを親きょうだいに見られるのだと思うと、
死ぬと決まったせめて前日には
どうか神様連絡下さい、と
願わずにはおれなかった。

私は泣いていた。

父ちゃんのシャツに顔をうずめて泣いていた。

父ちゃんのシャツには、父ちゃんのおいがしみついていた。

私は父ちゃんのおいをかぎながら泣いた。

シャツにはシミがついた。

私の

涙と鼻水のしみ。

母ちゃんはそばで

アイロンをかけていた。

母ちゃんは無言だった。

「父ちゃん・父ちゃん・」と

言いながら私は泣いた。

アイロンからは蒸気がシュンシュン音をたてていた。

私はその音がこわかった。

今にも母ちゃんがそのアイロンをもって

「いつまでも泣きよったらええ！」と

襲いかかってくると思ったからだった。

私は泣きやもうと思った。

でも、泣きやむことはできなかった。いや、

本当は涙をとめることは

できたはずだ。

でも私は泣きやまなかった。

相変わらず父ちゃんのシャツに顔をうずめながら

ほんのわずかな隙間を使って

母ちゃんの様子を見た。

母ちゃんは

険しい顔をしながら

アイロンをかけていた。

私はいつのまにか、

眠ってしまっていた。

「咲歩（サホ）。父ちゃんと母ちゃん、どっちにつくね？」

母ちゃんがおまん（正座）に座って、私に聞く。

「えっ・・・？どっち・・・って・・・？」

私もおまんに座って、母ちゃんと向かい合わせでひざを突き合わせた。

あれは、6歳だったか、8歳だったか・・・
妹が産まれたころだったから6歳か。
寝ている私の足もとからゴソゴソと
何かがいあがってくるものがあった。

暗闇の中でうごめくそれは
タバコとお酒のにおいを吐き出しながら、
ゴツゴツとした指をのばしてきた。ふしくれだった
真っ黒な指、
いくら洗っても落ちない油で汚れた指。
私はその日から油まみれの真っ黒な指が大嫌いになった。

■□■□■□■□■□

母ちゃんに「あのこと」を言おうかどうしようかずっと迷った。

「母ちゃん、あのね・・・」

台所仕事をしている母ちゃんの背中に

おそるおそる話しかけた。

「母ちゃん、この間父ちゃんがな・・・」

母ちゃんは包丁で大根を切っていた。

「父ちゃんがな。こないだサホのふとんに入ってきよって・・・」

母ちゃんの背中が震えていた。

くるっと振り返ったかと思ったら、包丁をにぎりしめたまま、
私を強い光で見た。

殺される！瞬間的に私はそう思った。

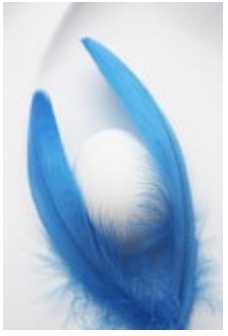
「サホ。母ちゃんが守ってやるけんね。ずっと・・・ずっと・・・。

安心しよったらええ。」

母ちゃんは背中をゆっくりさすってくれた。

「けど、そのことはもうこことで終わりにしんさい。

誰にもゆうたらいかんがいね」



それから何事もなかったかのように、
母ちゃんは過ごしていたが、
私はいつも不安だった。
いつか、母ちゃんがいなくなるのではないか。
母ちゃんがいなくならないよう
私は家のお手伝いをいっぱいしよう、
妹の面倒もみよう。
でも、そう思う一方で
小学校高学年にもなれば
母ちゃんは本当に幸せなんだろうか、と
思うようになった。
また、私たちもただ家族として暮らしているけれど
それで本当に幸せなんだろうかと
考えるようになった。
何日も帰ってこない父ちゃん。
生活費を入れない、入れることができない父ちゃん。
ただそれに耐えている母ちゃん。



家族と一緒に暮らしていればそれでいい、
とはとても思えない出来事が次々と起こった。

私が20歳になったとき、母ちゃんはそれを
待っていたかのように
家を出ると私に言った。

「私は・・・もう働いてるきに・・・
一人で暮らすわ。母ちゃんは
愛摘（あづみ）と一緒に暮らしよったらええ」

「そうか・・・」
母ちゃんはさみしげな、でもどこかホッとしたような
うれしささえ漂ってくる面持ちであった。

私が気になるのは
6歳下の愛摘のことだった。

「愛摘は・・・どういうわけかお父ちゃん子やけんね。
このことはもう話しよったん？」

「いやーまだ話しよらんと。
まだ愛摘は14やきに、むずかしゅうおもいわ。」

引っ越しの日は手伝った。
父ちゃんは「今度の家も狭いけんのー」と
ノンキなことを言っていた。

引っ越しの途中、
ふいに愛摘の姿が見えなくなった。

「愛摘・・・どこ行きよったんやろう・・・？」
しばらくすると、
どこからか愛摘が帰ってきて
「新しい家の電話番号わからんかったもんやけん・・・」

とつぶやいている。
「えっ？何？どうゆうこと？」
「せっかく・・・レベッカのコンサートの電話予約・・・
つながったのに・・・この家の電話番号わからんかったもんやけん・・・
申し込みできんかった」

愛摘は携帯を持っていなかったため、
公衆電話から
コンサートの予約受付の電話をかけたらしい。

「ウソ！あんなにいつも楽しみにしとったのに・・・
電話番号なんて前の家の電話番号でもよかったきに・・・
それに、この家の電話番号ももうあるはずじゃけん、
ちょっと母ちゃんに聞いてくるわ」

駆けだそうとする私の背中に、
「もうええっ！ええんじゃ！」と

叫ぶ愛摘の声がおおいかぶさった。

「なんで？もう一回電話しよったらええ」

「もう無理や。もうええ・・・」

愛摘は窓をあけ、外の景色を見つめた。



「引っ越しなんか・・・引っ越しなんか・・・するからや！」

愛摘の目はどこか遠くを見ているようだった。

愛摘の目には何も映っていなかった。

1年後。

母ちゃんから再婚すると連絡が入った。

母ちゃんの幸福は何より願うところだが、

私はまた愛摘のことが気にかかった。

この間やっと高校に入学したばかりで、

母ちゃんは公立に入れたと

そのことばかり喜んでいて、

愛摘の本心は別のところにあることを私は知っていた。

高校に入ってすぐにアルバイトをはじめたのも、

普通の高校生のようにお小遣い稼ぎのためではなく、

少しでも早くお金をためたいようだ。

そのお金をどうするのかは詳しくは話さないが

大体の察しはついた。

「勤め先でね・・・気の合うええ人にでおたんよ。（出会った）

母ちゃんのこといろいろ話したら、

そんな苦労は絶対させへん、ちゅーてね」

母ちゃんは昔の女学生にでも

戻ったかのように、はしゃいでいる。

「愛摘にゆーたん？」（言った？）

「それが・・・またね・・・まだ言えんでおる」

母ちゃんは何かいつも愛摘に気を使ってる。

「やけん・・・占いでね・・・みてもろうちよるけん」

「占い？」

「そう。四柱推命っちゅうやつ。

今度の人と。あと、愛摘や咲歩（サホ）たちとの相性なんかもね」

「えーなんち、いわれよったん？」

「まあー先生は、そない手放しでええようにはいつも
言わんひとやからー。」

「まあ母ちゃんと今度のお父さんとは
相性はええんきに。

それでも相性がいいから、
うまくいくっちゃうもんでもないらしいけど。
まあまあこんなもんちゃいますかーって・・・
フオッフオッ・・・」

母ちゃんは変な笑い方をしている。
母ちゃんは占い好きで、
何かと占いでみてもらうクセがあり、一時はその
先生に直接占いを習っていたくらいのめりこんでいた。
新しい父ちゃんのことを

「お父さん」といってる母ちゃん。
私たちに気を使っているのか、男性のことを尊敬しているのかもしれない。
母ちゃんが幸せになってくれるのはうれしいはずなのに、
なぜか手放しで喜べない。

「母ちゃんな一晩年ようなるっちいわれたけん。
人生これからよー」

「愛摘は？あづみとのことはなんていわれよったん？」
私は母ちゃんの言葉をさえぎるように聞いた。

「んー。まあ気いの強いところもあるけど、
根っこがグラグラしよるらしい。
まあだようわからん娘さんやねー。って
いわれた。

そう言われればあたってるやろし。
今度のお父さんとは距離を置きながらうまいことやりよるって
いいよったよ」

「ふーん・・・今度さ・・・」
私はふと思いついたことを言おうとした。
それより先に今度は母ちゃんがさえぎった。

「あ、今度お父さんがあんたたちと一緒にご飯食べに連れて行って
くれるっちいってくれたけん、どこがいい？」

私の思いつきは先に計画されていた。

「二人ともベッピンさんやね」

私と愛摘の前に座った初老の男性がそう言った。

私と愛摘はニコリともしないで、ただその場を流していた。

「まあ気いつかわんと、どんどん食べてよ」

鍋を囲みながら

母とその男性はビールを酌み交わす。

私たちもあいさつ程度にビールを飲んだ。

そのうち母が頬を赤らめて、

「あ、なんだか酔っ払ってきたわー。

気持ちよくなってきたー」と

その男性に頭をもたせかけようとせんばかりに

しなだれかかろうとした。

今まで見たこともない母の顔。

そのピンクのほっぺをした母に女を感じ、

軽い嫌悪感を覚えた。

「いやらしい！いいトシをして・・・」

しかし、顔にはそんな気持ちはオクビにも出さず、

4人の食事は静かに終わった。

食後は「なんでも買うたるけん、なんでも言い」

といわれ、4人は商店街をひたすら歩いた。

「なんでも」といわれても困るなあ〜・・・と

内心想った。

あまり高すぎず、安すぎず、

それでいて自分が心から喜べる

欲しいと思えるもの。

そんなものを瞬時に探すのは不可能だし、何より

男性の「気に入りたい」という欲を満たしてあげるため、

欲しいものを探すのは苦痛でさえあった。

しかし、その見え見えの下ごころにさえ

こたえてあげるのが子どもの立場であった。

意外にも愛摘は現金に

こういうときだけは無邪気に

「ラッキー」とでも

思えるような様相で

雑貨店にはいり、あれこれ物色しはじめた。

そうして、普段自分では買えないような

デザインと金額のネックレスを選び

母から「そんなもん、欲しいかと。」と

言われながらも買ってもらっていた。

私はといえば、

右を見ても左を見てもスカーフ全盛時代であったので、

いくつあっても困らないスカーフを

買ってもらった。

しかし、食事をごちそうしてもらったり、

ものを買ってもらおうということでは

その人のことを好きになることはできないんだな、と

生まれて初めて実感した。

母と男性は「用事がある」といって
二人になりたがり、私と愛摘は

じゃあここで、といって母たちと駅前で別れた。

帰る間際、最後に何か言わなくては、

と

焦るばかりで

「今日はどうもありがとうございます」

と言ったのが精いっぱいだった。

愛摘はそれさえも言わなかった。

帰りの電車の中、愛摘はため息をついていた。

「明日からテストやったのにな～

こんなとききて・・・」

「テスト？それやったらそう言えばよかったのに・・・」

「そんなこと言えんじゃろう。それに・・・こんな雨の中きて・・・

エライとおもわん？」

「そんな・・・きたくないんやったら、無理してこんでもええが。

ごちそうしてくれる人に悪いじゃろ」

「お姉ちゃんかて無理してお礼いうとったじゃろ。

心に思っていないことはいわんでもええが」

「せやし、それがオトナのつきあい、ちゅうもんやけん。

これからも長くつきあっていくんやし」

「そんなオトナになりとうない」

そう言っていた愛摘は

高校卒業するやいなや、

結婚して家を出て行った。

私と愛摘は、6歳違いということで
ほとんど一緒にあそんだ記憶がない。
あまり接点のないまま
お互い成長した。
だから愛摘が、親の離婚や結婚に関し、
どのように思っているのか、
どのように感じていたのかは想像の範ちゅうでしかない。
しかし、愛摘が父ちゃんっ子だったことは確かだ。
父ちゃんは、子どもが大好きだった。
小さい子どもなら近所の子供でも大好きで、
何かと話しかけたりちょっかいを出した。
私は、そんな部分も嫌いだった。
愛摘が生まれた時、それはそれは
大事にして喜んでいた。
毎日お風呂に入れるのは父ちゃんの役目だった。

そんなときに私はあの、いまわしい事件が起きたのだが、
そんなことは愛摘は知るよしもない。
一度愛摘に父ちゃんに対しての本音というのを
聞いてみたい、と
おもっていたのだが
そうすることは自分もまた、
相手に父ちゃんへの本音を告げなくてはならないことになり、
それを考えるととても言いだせなかった

もうひとつ、私は自分の「船橋」
という苗字が嫌いであった。
祖母が父ちゃんのことを「フナハシ」と呼び捨てにするからであった。
子ども心にどうして
おばあちゃんは呼び捨てにするのか、不思議であった。
もちろん、面と向かっては言わないが陰では
いつもフナハシ呼ばわりであった。
一度私もいる目の前で、母ちゃんに
「フナハシはやーこ(赤ちゃんのこと) おるんちゃうか」
と言ったときがあった。
私もそんなことは
もしかして・・・と薄々感じてはいたが、考えないようにしていた。
しかし、そんなことよりショックだったのが
なぜおばあちゃんがそんなことをいうのか、
それも私がいる前で平気でいえるのか、ということだった。
私はおばあちゃんのこととは
とても好きだったので、おばあちゃんに
そんなことを言ってほしくなかった。
だから、今の言葉は私は聞いてない、聞いてない、
聞いてなかったことにしよう、と
自分に必死で言い聞かせた。

その頃の私の願いは
早く母が離婚してくれて
苗字が変わることであった。
しかし、そんなことは
私は母に告げることはできなかった。
なぜならば、母は、
私や愛摘のために我慢して
結婚生活を続けてくれているからであった。

小学生のころ。

夜になるといつも父ちゃんと母ちゃんは、

ケンカをしていた。

そんなとき私はいつもフトンを頭からかぶっていた。

ある時、私はついにいたたまれなくなり

フトンをほうりなげ

「もうケンカしんといて！」と

叫びながら二人の間に割って入った。

「ケンカやないがいね。

話ししとるだけやげん」父ちゃんが言った。

「なあーも、心配することないがー」母ちゃんが言った。

母ちゃんは目じりにしわを作って笑っていた。

その顔にウソはないように思えた。

でも、どうしても私は心配だった。

やっぱり母ちゃんはでていってしまうかもしれん。

その時、置いていかれたらどうしよう、

連れて行ってほしいとおもった。

だけど、愛摘もおるけん、無理かもしれん。

もしかしたら愛摘だけ連れて行くかもしれん。

そんな不安の渦に巻き込まれ、

どうしても母ちゃんに聞きたくなった。

そして、ある日。

母ちゃんの機嫌のよさそうな時を見計らって。聞いた。

「母ちゃんは・・・どうして父ちゃんと結婚したん？」

すると、さっきまで鼻歌まじりに
用事をしていた母ちゃんが急に険しい顔をして
「もうええが、そんなことは。
そんなこつ、きくもんじゃないがっ！」
母の目からは今まで見たこともない光が
放たれた。
それから私は一切父ちゃんと母ちゃんのことには
かかわらないように気をつけた。

でも、それからもずっと
私には母ちゃんを苦しめているのは父ちゃん。としか
思えなかった。
父ちゃんさえいなければ、
こんなに母ちゃんが無理して働くこともないのだ。
でも、今は私の力ではどうすることもできない。
私は毎日母ちゃんの代わりに、愛摘を
保育園まで迎えにいった。
学校帰りに
ランドセルを背たろうたまま、行くのだ。家とは逆方向であるので
遠回りをすることになる。
友達から「一緒に帰ろう」といわれても
「妹を迎えにいくけん」といって断った。
家に帰ってきたら、
毎日お米をといでから遊びにいった。
買い物のメモとお金が置いてある日は
買い物に行った。
近所の人
「サホちゃんえらいね」
「大変だね」と、いつもいつてくれたら私はちっとも
自分のことをえらいとも
大変だとも思わなかった。

「おおきくなったら、いいお嫁さんになれるげん」と
いわれたこともあった。
そのころは、
かすかに
大人になったら幸せになれるかも・・・と
希望を持っていた。

今思うとなんてオトナは勝手なんだろう、と
苦笑するしかない。
そんなオトナの言葉を真に受けていた
透明の部分を持っていた私。
今は、結婚どころか
男とまともにつきあうことさえ
できない自分になってしまった。と
自嘲する。

もう、いいかげん
父ちゃんの呪縛から解き放たれたいと
頭ではわかっている。
でも、何かが足かせになっていて動けなかった。



もう、私はオトナなんだから
一人で自分の足で歩いてかなくちゃ。
いつまでも、こだわりもってたって仕方ない。
いくらそう考えようとしても、
いやそう思えば思うほど、
忘れるどころか
父ちゃんへの思いは憎しみに変わっていった。
その感情は自分では認めたくないものでもあった。
それは自分可愛さのためであった。
因果応報という言葉があるように、
こんな悪感情を持っているということは、
いつか自分に何らかの報復として、
かえってくるのでは、という恐れがあった。
気がつけば、私は30歳を過ぎていた。
母とはつかず離れずのつきあいをしていたが、
ある日連絡がはいった。
お父さんがガンで入院したという。
お父さんというのは母の再婚相手の呼び名である。
父ちゃんのこと
離婚しようが、遠く離れて私たちとは
無縁の生活になるうが、
それでもやはりどうしても何かと話題にのぼる。
その時の呼び名は「父ちゃん」だった。



1年間入退院を繰り返し、闘病生活を送ったお父さんは
真夏の猛暑の中、ついに力尽き旅立った。

入院中母ちゃんは足しげく
病院に通っていた。私も千羽鶴を持って見舞いに行った。

お父さんは千羽鶴自体には無関心で、
少し拍子抜けしたが
他に手伝える
こともないのでせめてもと
せっせと私は鶴を折った。
そうはいつでも一人で千羽折るのは大変で、愛摘にも
手伝って欲しかったが、
そもそも愛摘は
ろくに見舞いにもこなかった。

お通夜と葬式の段取りも
すべて母ちゃんと私で決めた。

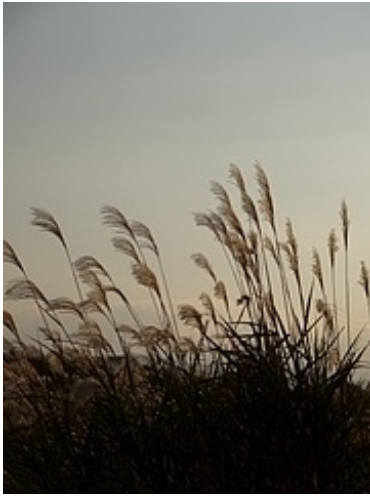
亡くなった翌日が通夜であったのだが、
愛摘は、
「映画の席を前から予約していた」などといって、
昼間堂々と出かけ、夕方になって
涼しい顔をして戻ってきた。



愛摘は

お通夜、葬式とも一粒たりとも涙を見せなかった。
昔飼ってた犬が死んだ時は
あれほどワーワー泣いて
翌日顔が腫れ、
涙をふきすぎてほっぺの皮がむけるほどであったのに。
そんなことを思いながら
横目を見たが、
いやその自分さえも
涙が出たのは
わずか出棺の時だけであったことを
思えば
大差ないな、と思えた。
なんて薄情な姉妹なのだろう。

母ちゃんは焼き場で泣き崩れ、
私は母ちゃんのなぐさめ役をすることで
泣かない娘も母を助ける気丈な娘と
映ればいいな、と
そんなときでさえ計算高くなる自分に
呆れていた。



虹の心もとはは 21

お父さんの一周忌も迫ったある日、
今度は実の父ちゃんがガンだという連絡を受けた。

「えっ・・・？また・・・？」

思わず口走った。

「そやし。もう、あっちもこっちもガンばかりやけん」

母ちゃんはどこか笑いをこらえているようにさえ

感じられる。

「父ちゃんの弟から連絡がきよってな一。

いっぺん、見舞いでもきてくれんち、いわれてな。」

「それで・・・行ったん・・・？」

「まあ一回回か行きよったんやけどな」

聞けば、実はお父さんの世話をしていたときから

重なって時折父ちゃんの見舞いにも顔を出していたらしい。

「なんで、そんなん行くんげん」

「なんでやっち、言われてもな一」

私は母ちゃんが理解できないでいた。

「そんなん、しよったらキリないし。

もう、母ちゃんには関係ないことやが」

「そやが。

人からは未練か？なんち、いわれよってからかわれるげん」

「ほんまによ一」

私も呆れていた。

しかし、そんな私に

「今度父ちゃんの見舞いに行くげん？」と

聞いてきた。

『父ちゃんの見舞？何でそんなモンいかなあかんげん』
そう思う咲歩の目の端に
部屋の隅につるされた千羽鶴が映った。

お父さんの千羽鶴を折っていたが、
一人では間に合わなくてあと200羽というところで
完成できず、渡せずじまいになっていた。

1本ぶら下がっているのは
100羽のはずだ。
この100羽だけ持っていくか？
千羽鶴の回し使いなんて、なんて娘だろう。
それとも、ちょっとそれは気がとがめるので
あと100羽折って200羽として持っていこうか。
もう、心は行く気になっていた。
「私も行くげん」と答えていた。
父ちゃんに会うのは、これが最後になるかもしれん。
父ちゃんと離れて暮らすようになって11年。
一度も会うことはなかったが、父ちゃんは私のことが
わかるだろうか？



たかが11年だし、成人になってから別れたのだから
少し老けたくらいで、

そう変わってはいない。

ボケが入ってない限り、私のことはわかるはずだ。

そんな心配をよそに、
父ちゃんは思いのほか元気であった。

私が父ちゃんのベッドのそばにいきなり、

「サッコか？」と言った。

サッコ・・・そうだ、この呼び名。
世界中で一番嫌いな呼び名だった。

小学校のときに家に遊びに来た友達が
父ちゃんが私のことを「サッコ」と呼ぶのを聞いて
「サッコとよばれちよるん～」と
からかわれて以来、大嫌いになった。

その大嫌いな呼び名を世界中でただ一人、
今も呼ぶ父ちゃん。

確か咲歩という名前は
「咲いて歩けるように」と
父ちゃんがつけたと聞いたことがある。
咲くどころか、
もう咲かないまま枯れていってるよ。
・・・私は心の中で毒づいた。



「きてくれたんかー。ようきよったけん」
「うん・・・」
父ちゃんは確かに父ちゃんであったが
11年という歳月と病気が父ちゃんをすっかり
以前とは違うもののようにしてしまっていた。

「愛摘は？」
「愛摘はきよらんけん」
母ちゃんが答えた。
「愛摘は父ちゃんの見舞いに行くかどうか聞きよっても、
ハッキリせんとね。行くとも行かんともなあーもいよらんけん」
「そうか・・・」父ちゃんは力なく笑ってる。
「愛摘はドライなところあるげんね。
やけど、愛摘、結婚しよったんよ」
明るい話題を提供しようと私が言うと、
「そうかーそら、愛摘はさぞかしええ彼氏みつけたんじゃろ。サッコは？」
「私はまだしとらんよ」誰のせいで・・・
と思おうとしたが、ベッドに横たわる父ちゃんを見ると
そんな気が消え失せた。
「父ちゃん、これ」
持ってきた千羽鶴を差し出すと
「わー鶴か。
ええなー。折ってくれよったんか。部屋があかるうなるわ」
思いのほか喜んでくれ、お父さんとのあまりの反応の違いに
私はなんだかうれしくなった。



「父ちゃんは、こーゆうもん好きやげんね」

「どっか吊るしとってー」

父ちゃんは鶴を持った手を上下に動かしながら、

うれしそうに

鶴を見ていた。

ふと見ると、台の上に携帯電話が置いている。

「父ちゃん、携帯もつとるき？」

私が驚いて聞くと、

「もつとるよお、そら。しょっちゅうとめられよるけどよ」

「ケイタイ止められるって

イマドキ高校生でもそうそうとめられんよ」

「ほんまに父ちゃんは気楽やげんね。

そげに気楽に生きれたら人生たのしやろね」

母ちゃんが皮肉を込めて言う。

「そら一たのしーよ。

生きてる間は楽しい生きらんとね。

死んだら終わりやげん」

”死んだら”・・・その言葉が私の胸の奥からトゲを突き立て、

突き破り、細胞を壊す音がした。

「死んだら・・・どうするかね、父ちゃん」

私は胸の奥から何かが湧きあがってくるのを

押さえながら聞いた。

「ん？どうもせんよ。それで、終わりやげん」

「墓・・・とかは？」

「そんなもん、考えてるがいねー。このシトが・・・」

間を割って入って母ちゃんがケラケラ笑いながら言う。

「墓みたいなもん、どうでもええ。

海でも山でもドブ川でも、骨まいてくれたらそれでええ」

「人の生きざまが、そんなま死にざまに出るっちゅーじゃろ」

母ちゃんが呆れたように言う。

「まあ一実際は市がやってくれよるんやろ。
父ちゃんの場合は無縁仏でもなんでもええ」
父ちゃんは、自分のことなのに
本当にどうでもいいようだ。



帰りは、いいと言ってるのに、

送るといって聞かず、

エレベーターを3人で降りた。

「病人に見送られるなんち、はじめてやけん。」

母ちゃんが言う。

「もう、ここでいいけん。」

私は病院の出入り口を出たところで

こらえきれず言ったが、

それでもまだ門のところまでついてきた。

小雨が降ってきた。

「もう・・・もう・・・ほんまにいいけん」

雨が父ちゃんの肩を濡らしていた。

2,3メートル歩いて思わず

振り返るとまだ父ちゃんは立っていた。

軽く手を振っていた。

私も手を振った。

多分、父ちゃんの姿を見るのは

これが最後になる。

「父ちゃん・・・。」

心の中でつぶやいた。

2,3歩後ろ向きに歩いて

思い切って前を向いた。

もう、振り返らない。

そう、心に決めた。



ある晩、夢を見た。

母ちゃんが犬を抱えてどこかへ行こうとしていた。

「母ちゃん、どこへ行くげん。

どこへ連れて行くげん。」

母ちゃんはチラっと私を悲しそうな目で見て、どこかへ消えた。

あの犬は最初に飼ったチロだったか、

次に飼ったクルミだったか。

チロは5歳になった時、ジステンバーで死んだ。

あの頃は、犬に予防注射するということが

浸透していず、あっというまにひろまった。

次に飼ったクルミは父ちゃんが

自由に遊ばせてやろうと

クサリを離して遊ばせてやったとたん、

そのままどこか遠くへ行ってしまう、帰ってこなかった。

チロ・・クルミ・・その次はミルだった。

ミルは父ちゃんと離れることになったとき、

父ちゃんのところへ置いて

私たちは出て行った。

最後はどうなったのか、わからない。

夢にでてきたのはどの犬だったのか・・

クルミはメス犬だったので、

一度お産をしている。

その時の仔犬なのか・・？

そんなことはどうでもいい。

私は首を振った。

何か嫌な予感がした。



「父ちゃんは・・・どうしてるんだろう」

嫌な予感に包まれて
母ちゃんに電話した。

「母ちゃん・・・父ちゃんが・・・もし・・・もし、
死んだら・・・私らに連絡くるん？」
電話で聞いてみたら、
母ちゃんはあっさり
「そんなもん、こんよ」

「えっ・・・？じゃあ、今どうしてるか、とか
病院に電話して聞いてもわからんけんね？」
「病院に電話して聞いても、
今現在、入院してるかどうか、ちゅーことしか
教えてくれんけんね」

「そう・・・なんや。母ちゃん・・・電話したん？」
「あ・・・ああ・・・一度したんやけど。
現在入院してません。ち、いわれるだけやけん」
母ちゃんはきまり悪そうに言った。

もし・・・万一のことがあったとして、
どこの誰かわからん人に
亡くなったなんてことは言えんからじゃろ？

「母ちゃん・・・父ちゃんの住んでたところ、
前一回行ったことある、っち
いいよらんかった？」
「あ一行ったよ」

私は母ちゃんに場所を教えてもらった。

「街のMelody」



駅に着いた。

駅前に和菓子屋があり、
私は引き込まれるように店に入って
おはぎを買った。

父ちゃんの好きなこしあんだ。

私は父ちゃんに会いに行くのだ。

何のために？

私は会いたいのだろうか？
会ってどうするつもりなのだろうか？

そもそも父ちゃんは生きているのだろうか？

私はおはぎを持って歩きだしても、
まだ迷っていた。

心は駅のほうへ駅のほうへと
引き戻されていた。
しかし、足は進むべき方向へと向かっていく。

父ちゃんが間借りしているという電器屋さんは
田んぼの横にひっそり立っていた。

田端電器店。・・・ここだ。

お店の隣に錆びた鉄の階段があり、
そこを登っていくと、
住居らしき入口にたどりつくようだった。

お店の隣に古びた犬小屋があり、
そこにやせ細った犬がつながれていた。

毛には色つやがなく、ゴワゴワ、パサパサ。

私が近づいていくと、犬は力なく近寄ってきて
でも尻尾だけはちぎれんばかりに振っている。

お店の中から
店主さんらしき人が
気配を感じてでてきた。

「その犬・・・飼ってくれんかの？」

虹の心もとはは 最終回

「この2階で住んどったおやっさんが、
長い間可愛がったんやきに」

「・・・あ、あの・・・おやっさんというのは・・・？」

「船橋さんよ」
やっぱり・・・確信で声が震えた。

「あの・・・その方は今・・・？」
「2カ月くらい前かな。亡くなってしまってたけんね。」

やけん、犬だけいつまでもどうしたもんか、思いよってね」
私の胸は早鐘のようになりだした。
「もう、いっそのこと保健所に持っていこうとかか、
考えよったけど、おやっさんがえろう
その犬を可愛がったもんやけん。
その姿を思い出したらなー。ようしきらんかってなー」
私はその犬の前にしゃがんで頭をなでていた。
犬はなぜか、私の膝にお手をしてきた。
「あんた・・・おやっさんの知り合いかなんか？」
「ええ。。まあ・・・」

犬の顎の下に手を持っていくと、
ペロペロなめられた。

多分・・・まともなえさはもらってはないだろう。

ただ生きてるだけのこの犬・・・
父ちゃんも、ただ生きてるだけだった。

そして、私も・・・
ただ、生きてるだけ。

何が違うのか。
何が変わりあると言うのか。

「あ、そーそ。犬を引き取ってくれるような人が
現れよったら、手紙わたしてほしいっち、
いわれよるけん。ちょっとまってや」
私の返事を聞かずに
店主は中へ入った。

しばらくするとクシャクシャになった
紙の切れっぱしを
渡してくれた。

「心ある方へ。
どうか、この犬を大事に育ててやってください。」

名前はサッコといます」

犬の体をなでると
ゴツゴツした背骨が手に跳ね返ってきた。



やぶこのひとり言・長い間

連載お読みいただきましてありがとうございました。

次回より、現在アメブロで
連載中の

「寝盗った女と寝盗られた女」を

移動させていきたいと思えます。

よろしく願いいたします。